特別企画

四條畷市出身の関取

朝紅龍関インタビュー

昨年7月、四條畷市出身の石崎 拓馬さんが大相撲で十両昇進を果たし、関取になりました。関取は、幕内と十両あわせてたった70人、羽織袴の着用や大銀杏の結髪などが許される、力士の中でも特別な存在。地元・大阪での三月場所を控えた3月6日、これまでの歩みや現在の思いを聞きました。

［プロフィール］四條畷市相撲連盟で相撲を始め、明徳義塾中学校・高等学校（高知県）、日本体育大学で学生相撲を経験し、令和3年五月場所で初土俵、2年あまりで関取に。四股名は朝紅龍 琢馬。高砂部屋所属。

強くなるため 故郷・四條畷を離れた

相撲を始めたのは小学3年生のときだと思います。わんぱく相撲の1回戦で負けて、そこからやったのは覚えています。当時レスリングと空手もやっていて、どれをやるのか正直悩んだこともあったんですけど、相撲が一番楽しかったですね。一瞬の勝負で、勝敗が決まる。判定とかではなく、誰が見てもわかる。そんなところが僕に合っているのかなと思います。

— 四條畷市で過ごしたのは小学校までと短いですが、地元への思いなどはありますか？

小学校卒業後、相撲をやる環境が整っている明徳義塾中学校・高等学校に進学しました。普通は高校からですよね。お世話になった市の相撲連盟の人とか、地元を裏切ったみたいな気持ちもあって…その分強くなって四條畷を盛り上げていきたいと思っています。僕が通っていたくすのき小学校は、ぐっさん（山口智充さん）の出身校でもあって（山口さんは合併前の四條畷西小学校出身）、校歌を作ってもらい学校に来てくれたのも覚えています。四條畷からこんな有名人が出ている、僕も相撲でそんな一人になれたらいいなと、地元を離れてからずっと思ってきました。

— 名門・明徳義塾への進学後は、大変なことも多かったですか？

結構きつかったですね。稽古もですし、インタビューで言えないこともいっぱいあります。中学のとき、一番きつかったのはホームシック。毎日泣いていました。よく耐えられた。続けてきてよかったです。

— 周囲より体が小さく、父親によると食事など体を大きくするのにも苦労していたそう。それでも、中学3年生で全国都道府県中学生相撲選手権大会団体優勝、高校2年生で国民体育大会相撲競技少年の部・個人3位などの成績を残し、大学も強豪校に進学しました。

大学入学時も体重は100kgなかったです。相撲は無差別のイメージがあると思うんですけど、実は大学では体重別で８階級あるんです。細くても活躍できる。なので、最初は小さい階級で活躍して大学4年間を過ごせばいいと思っていました。でもやっぱり根っから相撲が好きで、大きい人に挑戦して勝つのが楽しかったんですよね。それで体重を増やして、無差別でもやってみようと思っていたら、1年生でインカレ（全国大学相撲選手権）のメンバーに入って。「センスあるんかな」と思って、初めてプロも視野に入れようと思いました。

— 稽古だけでなく、筋力トレーニングにも励み、体を大きくしていきました。大学4年生のインカレ直前にヘルニアで腰を痛めるアクシデントがありましたが、それでも痛み止めの注射を打って出場し、個人3位に入りました。

そのとき確信しましたね。全国3位になって「付出（つけだし）」という資格をもらうんですが、ここまでやってきたならプロに行かないと絶対に後悔すると思ったので、覚悟を決めました。

山あり谷あり 関取への道

— 大学卒業後、明徳義塾高校OBの8代高砂親方（元関脇・朝赤龍）がいる縁で高砂部屋に入門。初土俵は3年前の令和3（2021）年五月場所で、すぐに三段目優勝を果たしました。

入門当初は、すごく調子がよかったです。みるみるうちに上位に行きました。でも、そこでまたヘルニアになって、手術もして。一生付き合っていくしかないけがなので仕方ないんですが、2年ほどの間、本当に辞めたいと思うことが何回もありました。正直きつかったです。

— 部屋の兄弟子や仲間、弱音をはき出せる地元大阪の友だちの支えもあり、あきらめずに相撲を続けてきたと思うのですが、ご自身としてはどのように乗りこえられたのでしょうか？

僕の中で、「3年やって関取になれなかったらやめよう」と決めたんです。センスがないんだと。そう割り切ったら、気持ちはだいぶ楽になりましたね。十両昇進を決めた昨年の七月場所も、2連敗からスタート。それで、めちゃめちゃ吹っ切れましたね。「なるようになるわ」と。そうしたら、そこから5連勝して。

— 5勝2敗で勝ち越し、十両に昇進できる。当時どんな気持ちでしたか？

勝ち星を計算するとギリギリ上がれるかなという感じで。入れ替え戦で十両の人に勝って、それであがれるんじゃないかってすごくドキドキして。日本相撲協会から部屋へ電話がかかってきて正式に決まったときは、意外と「やった！」とはならなかったですね。どちらかというと、次のことを考えていました。「今まで以上に頑張らな、喜んでる場合じゃない」と。関取がゴールではなく、やっとスタートラインに立てたという感じでした。

— 朝紅龍という四股名の「朝紅」は、ご両親が朝焼けをイメージし「人生どんな困難でも乗り越えられる」という意味を込めたそうですが、ご自身では気に入っていますか？

今は気に入ってます。でも、今まで「石崎」でやってきたので最初は戸惑いました。高砂部屋は「朝」が必ずつくので、「朝畷」とかも考えていたんですけど、だめでしたね。親方（元関脇・朝赤龍）が「まず龍を入れて欲しい」と。入門からずっと今の親方に見てもらって、それで初めての関取なんで、期待をしてもらっているのかもしれません。真ん中の紅の字は、父がずっと「朝紅龍はどうや」と言っていたんです。この名前の価値は自分の成績次第です。活躍次第で、この名前もしっくりくるんじゃないかと思います。

関取として初の地元・大阪場所に挑む

— 十両昇進後は、7勝8敗、9勝6敗、8勝7敗と進み、今回4場所めを地元・大阪で迎えます。どんな目標で臨むのでしょうか？

地元ですけど、そんなに意識はしていないです。意識したらプレッシャーで力を出せなくなってしまうんで、いつもと変わらずのびのびとやりたい。目標は常に2桁勝利したいんですが、今まで9勝が精一杯。精一杯というか、もったいない相撲があって。それがなくなれば10勝できると思います。けがもないので、課題はメンタル面。最近、中日ぐらいから体がだれるというか、勝てる相撲も勝てない、もったいないことが多かったんです。なので、常に気持ちを抜かず一番一番集中してやりたい。土俵にあがったら集中して、あとはいつもどおり。場所中だからこそ、土俵外ではいろいろな人と話してリラックスして、普段どおりの生活を心がけたいです。

> 3月10日に始まった三月場所、東十両8枚目の朝紅龍関は初日から８連勝しました。しかしその後３連敗。12日目に「頭をつけて相手の懐に入る、若隆景関みたいな相撲をとりたい」と目標にしてきた若隆景関相手に勝ち星をあげたものの、9勝6敗で終えました。

— より高みをめざしながら、見てほしいのはどんな姿でしょうか？

僕は身長175cm、体重も120kgで大相撲では小さい方です。小さい力士だと変則的な相撲も人気だと思うんですけど、僕は小さい体で、正攻法で相撲をとる。体が小さい子どもたちでも、こういう相撲をとれるんだと、憧れのお相撲さんになりたいです。僕もずっと小さい体でやってきて、小さい力士にすごく憧れていたので、そういう存在になりたい。そして、相撲はかっこいい競技なんだということを伝えたいです。僕も精神的な部分が鍛えられ、何をやってもへこたれないようにはなったと思います。人間的にも成長します。相撲というと、痛いとか裸同然で恥ずかしいとかありますけど、やっぱり歴史のある競技なんで。僕は誇りもってやっています。言葉ではなく、自分の相撲で伝えていきたいです。